

# 佳作

## 表現すること

梅光学院中学校 三年

片山 ゆか

本を読むのが好きだった。物心ついたときから本がたくさんそばにあった。初めは絵本。鮮やかな表紙は幼い私の目を釘づけにした。その次は、父の広辞苑。ずらりと並んだ小さな文字を眺めるのが好きだった。もちろん意味などわかっていなかったが、天才児だと騒がれていたものだ。

それから、祖父の画集を眺めるのも好きだった。レンブラントやモネの絵画はずっと眺めていてもあきないくらいに美しかった。五歳の誕生日にそれをもらって、家中を走り回って喜んだのを覚えている。黒くてつややか

な表紙に、金の飾り文字で、外側すらも美しかった。

これといって特技のない私だが、読書と絵に対する情熱にかけては誰にも負けていなかったと思う。けれど私は、小学校三年生にして自分の限界を知ることになる。

図工の時間だった。あのときの私は愚かにもたくさん絵を見ているから、自分に才能があると思っていた。私はそのとき知ったのである。見るのと描くのは違うと。本当にシヨックだった。すらすらと描けると思った線はがたがたにふるえ、人物の目などは焦点が左右の目で違っていた。周りの子の絵と比べても不気味でへたな絵だった。

母は私の絵を見て、

「ある意味才能がある。」

と言った。つまりそれほどひどい絵だったのである。

家にインターネットの設備が整ったころ、私はまっさきに絵のことを調べた。私は明るい色使いの絵が好きで、今まで見たことがない絵が見ることができるようになり、一日の楽しみになった。

小学校五年のころだろうか。図工の夏休みの宿題として読書感想画を描かされた。学校に持っていくと、友達からさんざん笑われたあげく、

「気持ち悪い。」

と言われ、心に傷を受けた。なんでもそうだと思うが、一生懸命やったものを他人に否定されるのは良い気分ではない。それがたとえ真実であったとしても。私は本当に絵が好きだった。幼い頃からずっと憧れてきたものだった。だから私は、まるで自分が言われているような気持ちになったのだ。

今思えば、あの友達に悪気はなかったのだろう。ただ面白かったから、笑っただけなのだと思う。それでも小学生的の私はそれを許すことができなかった。しかもその友達は、読書感想画のコンクールで賞を取っていた。羨ましくて、悔しくて悲しかった。なぜか私は友達その人の絵をはっきりと覚えていた。紫色の花の絵だった。自分の絵は、全く思い出すことができないのに。

とにかく悔しくて、惨めな気分だった私は、インター

ネット上で「ひどい絵」と調べたのである。自分より下手な奴を探してやるうというハッ当たり気味な理由だった。だが、私はそこで、ある人物と運命的な出会いを果たした。出会いといっても、その人物の写真や絵を見ただけなのだが。

たくさんの画像がずらりと並んだ画面をスクロールした下の下にその人物の絵があった。初めに見たときは、「なんだ、うまいじゃないか。」と思った。でも、その絵を拡大すると、とんでもないものが描かれていたのである。椅子の上に乗った生首らしきものの絵だった。色づかいはとでもきれいなのに、なんだか気味の悪い絵だった。

調べた当初の思いなど忘れて、私はその絵を描いた人物を知りたい、と思った。ちょうどそのころ読んでいた本が芥川龍之介の『地獄変』だったのもあったからかもしれない。『地獄変』の中の絵師の良秀は、死体のそばに座って、それをデッサンしているような人だった。けちで、傲慢で、自分の弟子ですら絵のために痛めつける

最低な人。でも、才能だけはあったのである。私はなんとなく、その絵を描いたのは、良秀のような人物ではないかと思っていた。

拡大したその絵の隣には、ただ「不気味な絵」としか書かれていなかったので、絵を描いた人物を探すのはかなり大変だった。時間をかけてようやく見つけたその人物は、およそ良秀とはかけ離れていた。というより、正反対だった。

ポーランドの画家、スジスワフ・ベクシンスキー。少々内向的で、人当たりの良い人物だったらしい。クラシック音楽が好きで、よく聴いていたという。写真で見るベクシンスキーは穏やかそうな人で、とても生首の絵など描くような人には見えなかった。しかし、写真の下の作品紹介を見たときに、ぞっとした。

目から血を流す顔の絵だとか、たくさんの人骨が描かれている絵だとか、よくわからないけれど、とにかく不気味な絵だとかがずらりと並んでいたのである。私のように目の焦点や手足の位置がずれているから不気味なの

ではない。恐ろしく上手で、描かれているものが不気味さや気色悪さを感じずにはいられないものばかりだからだ。

ベクシンスキーの作品たちを見た日の夜、私は悪夢を見た。自分の部屋の壁から顔が出てきて、目から血を流しているのである。それからというもの、目を閉じればその顔が浮かんできて、眠るのが大変になった。小学生の心には、それほど刺激の強い絵だったのである。私は、その絵たちを二度と見るまいと思った。ただの木の下幹すら顔に見えるのだから。

しかし、子どもというのは好奇心旺盛な生き物である。そして小学生の私はその例外ではなかった。怖いもの見たさというやつだろうか。つまり、私はもう一度ベクシンスキーの作品たちを見たのである。いや、一度だけではない。何度もくり返して見た。なんだかベクシンスキーの絵は、「もう一度見たい」と思わせる何かがあった。よく見れば見るほどに不気味なのだが、どうしてか目をそらすことができない。じっと見ていると、い

つかどこかでこんな光景を目にしたことがあるかもしれない、などと思ってしまう。

ベクシンスキーは、自分の絵に名前をつけなかった。理由は本人以外にはわからないが、多分つけるのが難しかったのだと思う。ベクシンスキーは言葉では言い表すことのできない世界を描き出していた。まとめて言うなら退廃的だが、それとも少しちがう。本当によくわからない世界だ。ベクシンスキーの絵についてはいろいろな意見があったが、少なくとも私はそう思う。

物語を書くのも、絵を描くのも、何かを表現するためだ。でも、私にはベクシンスキーが何を表現したかったのかわからない。インターネットには多くの意見や解釈が載っていたが、私は自分で考えてみたいと思った。

中学校に入学すると、図工が美術になった。何をつくるにしろ、テーマを決められていてそれに沿って作品をつくらなければならない。何を書きたいか、何を表現したいのかを、自分の中で考えてから描かなければならない。何も考えずに描くことはできない。

だからきっと、ベクシンスキーも、自分が描いた絵で何を表現したいか考えたはずである。私は、ベクシンスキーが死や絶望ばかりを表現したかったとは思わない。彼の作品には、なぜか美しさや荘厳さがあるのだ。人を惹きつける何かも。

ベクシンスキーの絵のほとんどが、人に関係するものだ。私はそこに、人に対する思いがあるのだと思う。人によっては嫌な絵だと思う。でも私は、確かにそこに、愛が表されているのではないかと思う。

私は憧れていた絵の世界とは別の世界を見た。私はベクシンスキーのような絵を描きたいとは思えないが、彼の絵で学ぶことが二つあった。

まず、世界は明るいばかりではないということ。それから、絵には自分の気持ちを込めることができるということだ。

中学三年生になっても、相変わらず絵は下手だ。美術の時間によく笑われる。でも、下手なりに努力はしているのだ。インターネットでイラストの描き方を見ながら

練習したり、天気の良い日には外に出て風景や草花を写してみたりなど、考えつくことからやっている。私はいつか自分のありったけの思いを込めた絵を描きたいと思っているのだ。

私の人生の中で、ベクシンスキーと出会えたことは決して小さくないことだと思う。彼の絵で、表現するといふことは、必ずしも他人に良く思われるように努力するものではないということがわかった。これから、自分の絵で笑われることは少なくないと思う。でも今やっていることは、少しずつ形になっている気がする。誰に何を言われようと、絵を描くことは続けていきたいと思っている。

今まで私は、あまり人には自慢できないようなこともしてきた。人といがみあったり、うらやんだり、傷つけてしまったことが何度もある。でも、そのたびに他人のことを学ぶことができた。無駄なことは一つもなかったと思う。もちろん、自分がやったことは変わらない。けれど、そこから学んで先に進むことができると思う。こ

れからの人生を、後悔しないように生きていきたいと思う。

私は、自分に必要なものがわかってきている。最近、一枚の絵を描いた。それは、私の大好きな花だ。青紫の花びらを大きく咲かせる、六月の花である。相変わらず下手な絵だとみんなに笑われたけど、一人だけ

「一生懸命描いたね。」

と言ってくれる人がいた。今までのどんなことよりうれしかった。ようやく、自分の努力を表現することができるのだと思う。一人だけでも、伝えることができるのは、それはすごい事なのだ。